

跡見学園女子大学短大 村田 あが

目的： 江戸時代後期の家相文献における建築儀礼関連の記述の分析を通して、当時の住まい造り文化の一端を検証する。また、一家相相者の家造りへの関与と、家相文献刊行の状況について明らかにする。

方法： 江戸時代後期に畿内で活躍した家相流派の始祖である松浦東鶏の著作『家相図説大全』（寛政12年自序、享和元年刊行）の建築儀礼に関する記述を分析し、昨年度に報告した同著者による同時期刊行の2文献との比較検討をする。

結論： ①本書は図版を用いて専ら住まい造りの肝要を説くものと位置づけられ、住まい造りの各段階における注意事項を、心得・作法として記している。②同時期の他文献（暦主眼の教則本、儀式の作法書）と内容の分離を図るが提携は明らかである。③具体的な儀礼の記述は、地開き、鬼門柱、土蔵移徒、厠移徒、新井開設、旧井埋塞、家鳴り柱、崇樹に関する部分に認められる。④住まいの敷地選び、建材選び、間取りの決定から家移りに至るまで、総ての段階に家相相者が関与している。